

東部日本發掘の刳舟遺物

協同員 西村 眞次

第一章 緒言

我が邦に於ける船舶發達の歴史は、これまで殆んど研究せられて居らず、偶に研究したものがあつても、その古代に關するものは、傳説を基礎とした特殊の *Legendary history* のみに據る傾向があつたので、科學的價值が甚だ少かつた。傳説の上から古代船舶を研究することは、強ち無用の企てとはなく、また爾うしなければ或る方面の研究は寧ろ不可能でもあるが、近頃になつて、刳舟の遺物が所々で發掘せられ、船舶發達史研究の上に有力な新材料を提供したので、今後の研究は考古學的色彩を帶ぶることになり、従つて科學上の價值が一層高まる譯である。

予は從來、傳説並びに遺物の上から古代船舶の研究に従事してゐるが、先年來東部日本に於いて發掘せられた刳舟の遺物について調査を試み、此頃その大部分の研究を終つたから、こゝにその概略を記述して本協會先輩諸氏の一察を博したいと思ふ。

予が茲に述べんとするのは、歴史時代を超越した、極めて古い時代、即ち考古學の領分に屬してゐる先史時代 (*prehistoric age*) のことに屬し、遺物を除いては何等の證據がなく、文献も傳説も之については多くを語つてゐないものである。物を言はない遺物の研究は、考古學に基づいた特殊の方則によつて之を試みる外がない。従つて考へやうによつて、何うにでも立論が出来るのであるが、その中自ら確實な判断の方則があつて、比較論、純理論の兩方面から、動きの取れない結論を引き出すことが出来るのである。こゝに先史時代の研究の困難があり、同時に興味もあり、また權威もあるのである。可い加減な想像や、向不見の判断やは、誤り易き考古學的研究の弊害として、十分の注意を以て避けねばならぬ。



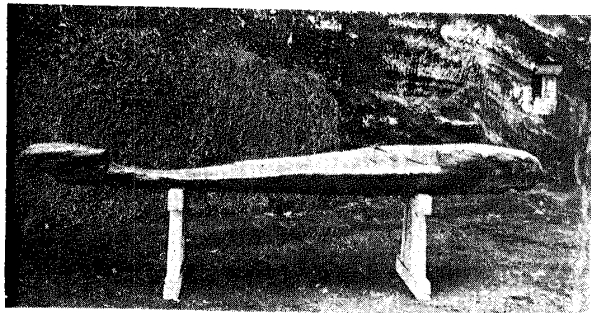
(圖五第)



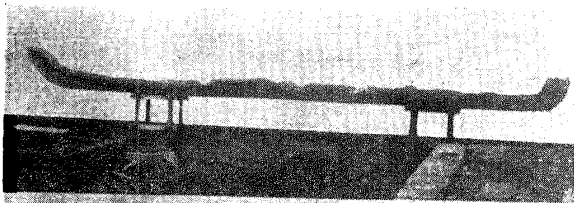
(圖六第)



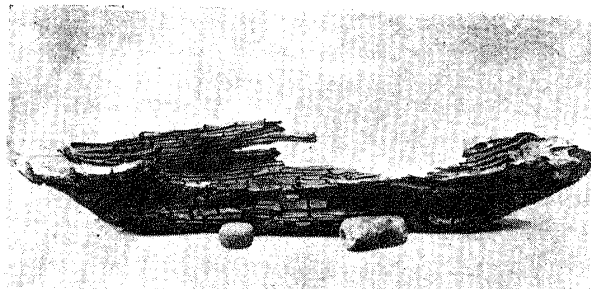
(圖七第)



(圖八第)



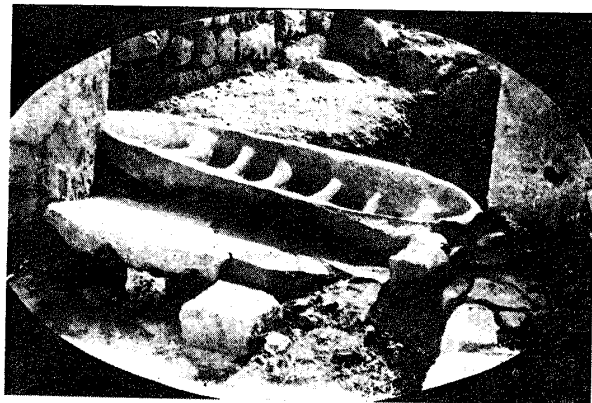
(圖九第)



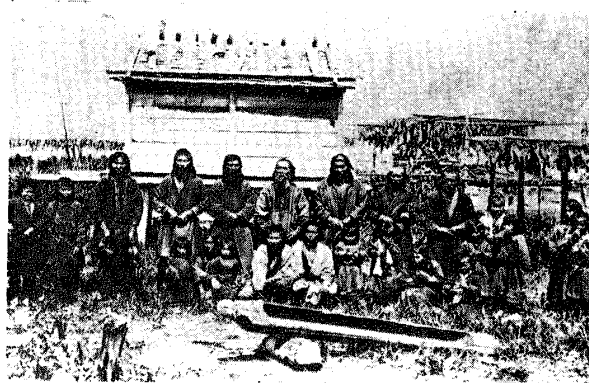
(圖一第)



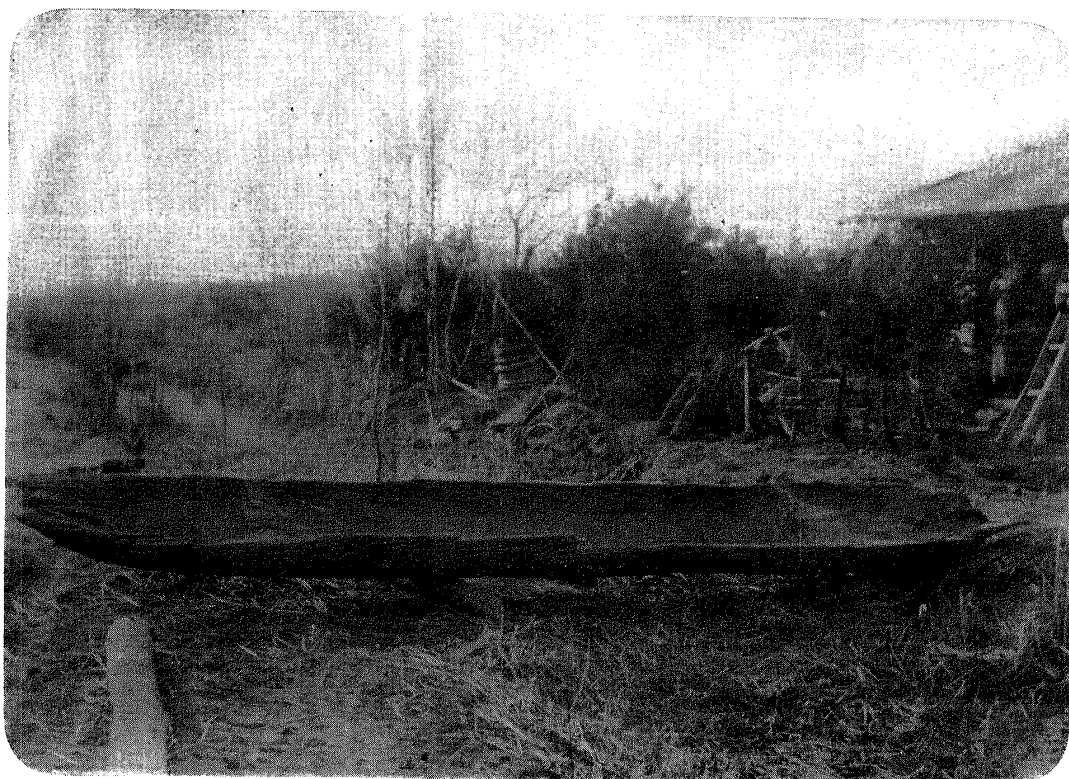
(圖二第)



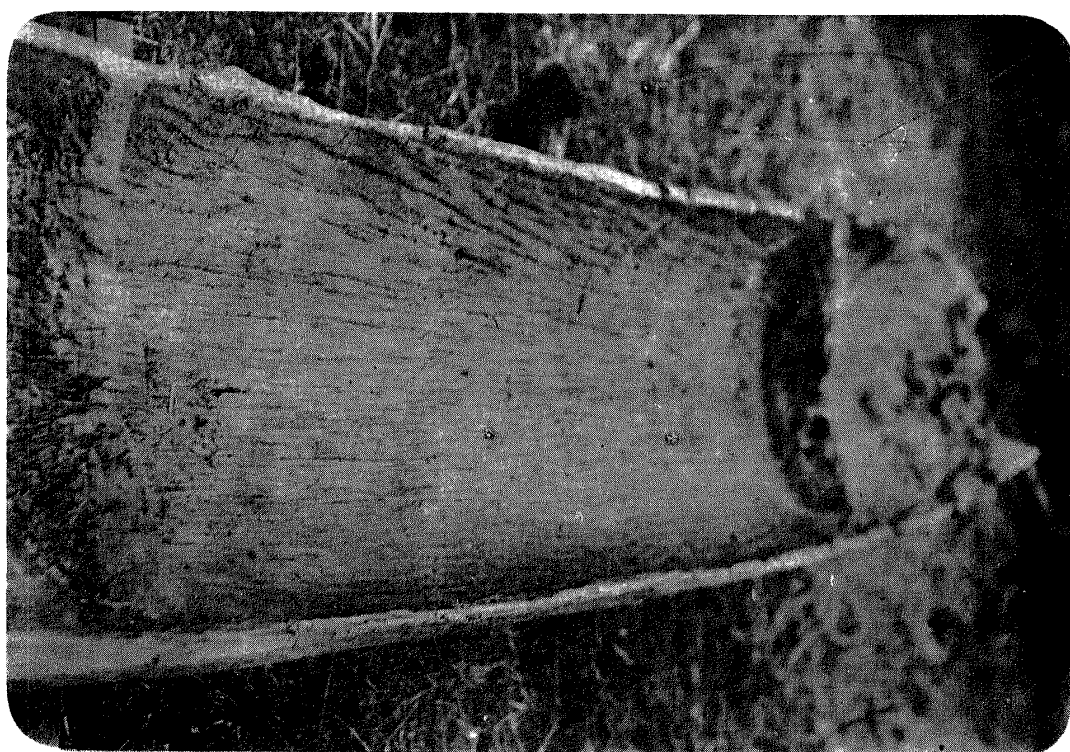
(圖三第)



(圖四第)



(圖 一 十 第)



(圖 二 十 第)

従來學者の説に従ふと、水上運搬具 (water-carriage) はその初め一本の丸太材であり、次いでその一端を尖らしたものが來たといふことになつて居り、船舶工學者は何れも此の説を是認してゐた。ところが、十九世紀の末葉に、考古學及び土俗學の基礎の上に、人類學の一大建築を試みたエドワード・ビー・タイラア (Edward B. Tylor) は、その前に單純な浮き (float) の時代があることを暗示した。彼はその著『人類學』(“Anthropology”) に於いて述べて云つた。——木枝の束を横たへて水上に浮かし、それが水中で自分を支へて呉れることを發明したものが、即ち最初のナヴィゲーションを初めた者である。従つて歴史は航海術の起原については、何等の記録を持つてゐない。けれども浮きや、筏や、小舟の原始的な形は、今尙ほ野蠻人の用ゐてゐるものでそれと窺はれる。……最も早く現はれたのは單純な浮きであつた。それは恰度南^{サウス・シイ・アイランド}海島の小兒が皮の着いた儘のココ・ナットに縋つて水上に泛ぶやうなものであり、又ホッテン^{トット}が河を横ぎつて山羊を泳がす時、自分は四肢を伸ばして、彼等の所謂『木馬』即ち柳の浮木の一端に乗つて體軀を支へるやうなものであつたらう。丸太材も浮きには相違ないが、それ以前に單純なココ・ナットの如き浮揚物を用ゐたことをタイラアは暗示してゐる。東洋では匏などが用ゐられたであらう。

處がわが邦のやうな島國では、極めて原始的な時代があつたとは思はれぬ。島國に於ける人類の棲息は、大陸の他の部分よりも後でなければならぬ。従つて其處へ移住の始まる前に、移住した民族は既に航海すべき器具を持つてゐるべき筈である。無意の漂流に依る移住ばかりではなく、單獨にしる、集團にしる、有意の航海に依る移住があつたとすれば、海を越えるべき航海具はあつたと見なければならぬ。此の點に於いて、わが邦の原始航海の研究は、深き興味に富んでゐるのである。

第二章 刳舟の種類

單純な浮き、丸太、尖り丸太、その次に筏が現はれ、筏から刳舟が來たことは誰しも認める所である。筏には草筏、竹筏、木筏の三種あるが、前二者は別として、木筏が刳舟の祖であることを始めて指摘したのは、ポロニア研究

所及び建築大學の教授であつた M. le Roy であつた。彼は千七百八十三年に巴里で出版された “Les Navires des Anciens” に於いて、二層の筏が三層になり、その第二層が刳舟の舷部に匹敵してゐることを指摘した。此の説を受け繼いで、John Finchem もその著 “A History of Naval Architecture” (一八五一年版) で同一の意見を發表し、如何なるカヌー、單材の刳舟ですらも、複雑な三層筏、或は單純な組船の後に現はるべき筈だと云つた。

吾が邦の上古に於いては、無論筏も用ゐられたに相違ないが、その移住時代は人智の稍々進んだ後であるから、主として刳舟が用ゐられはしなかつたか。筏と刳舟との間を綴つてゐる中間浮揚具 (Intermediate craft) ともいふべきものが、大正七年五月武藏の東村山村の狭山溪谷から發掘された。それは刳舟とも、筏ともつかぬもので、予は尙ほその研究中であるが、先づ中央アフリカの土人の現今使用してゐるものと同一の地位に在り、筏と刳舟との中間に介在してゐる一種のクラフトと見れば差悶なからう。

世界の刳舟は、割竹型と、鯉節型との二つに分たれる。ランケに従へば、前者は “German” type じ、後者は “Sussex” type である。平面圖に於いて前者は長方形を呈し、後者は尖鋭楕圓形を呈してゐる。予の考へでは、前者は後者の先驅であつて、丸太から刳舟に發達してゆく過渡期のもの、後者はそれが稍々進んで、建造者の頭腦が既に安定と速力とに捕へられてから後に出來たものと思はれる。わが邦ではまだ完全な前者の標品を手に入れないが、後者は甚だ多い。何れかといふと前者は Lacustrine 或は Potamic の傾向を帶んで居り、後者は Marine の傾向を帶んで居る。刳舟にはまた單材のものと、複材のものとあることは予が既に説いた所であるが、關東で發掘された遺物には複材のものはないやうである。東部日本で發掘された既知の刳舟は、小谷沼、濱田、大寶沼、清瀧、山川村、殘シ沼の六品に過ぎない。今これ等に就いて概略を述べて見ようと思ふ。

第三章 小谷沼發掘の刳舟

以上六品の中最も小形のスペンメンは小谷沼刳舟である。これは明治三十三年七月の發掘に係り、發掘當時の狀況

は詳しく知られてゐないが、吉田文俊氏の記述に従へば、發掘の場所は、小谷沼開墾地第十八番で、同地の悪水落とし（現今の中堀）の泥濘をした時、表面泥土から約四尺五寸の下で發見せられた。刳舟と同時に、同一の level から圓壘形の土製錘と石槌とが發見せられた。

小谷沼は茨城縣北相馬郡坂手村と内守谷村との間に横はつてゐる沮洳の地で、附近には小貝、鬼怒、利根の三大河が集注してゐるが、現今の如き地勢は極めて新らしい時代に出來たので、數百年前までは全く開墾の出來ない大きな marsh であつた。しかもその間には多くの丘陵が起伏して、その高臺には歴史以前から人類の住んでゐたことが、立葉山、内守谷に貝塚遺跡のあることによつて證明せられる。して見ると、此の刳舟は石器時代のものと斷定して差問がない。

小谷沼刳舟（第一圖）は極めて小さく、その長さは四尺一寸六分、廣さは一尺三寸五分、深さは六寸しかない。形は鯉節型で平面圖は稍々鋭尖なる長楕圓形を呈し、兩舷に當る部分は彎曲が次第に退縮して鈍圓なる底部に連續してゐる。舳艫は略ぼ同形であるが、舳部と思はれる方は他部よりも鋭尖し、その上部に於いて三角形の扁平部がある。これはわが邦固有の船には必ず現はれてゐるもので、千葉縣のヤンノウ船の『カンパン』や、青森縣の天當船の浪受板或は雜物置場など、同一性質のものである。刳は船側の輪郭に比例してゐる。側面圖は首尾共に中央部よりは稍々昂つてゐる。今刳舟遺物の大きさを比較して見ると、

Specimens	小谷沼	濱田	殘沼	大寶	山	川
Length	4'-16	9'-12	19'-30	21'-00	27'-92	
Breadth	1'-35	2'-25	1'-90	2'-00	2'-35	
Depth	—60	—65	—80	—70	1'-6	

といふ割合である。清瀧刳舟は不完全な品であり、且つ予は尙ほ未だ詳細を研究してゐないから、この中から省いて置くことにした。

理窟の上から此の刳舟を觀察して、こんな小さい物が人を載せる筈がないといふものが多い。渡瀬理學博士、鳥居龍藏氏などはその人々で、大野延太郎、吉田文俊兩氏は、臺灣打狗の *Tok-pai* の如く、此の刳舟の下に筏を裝置して安全に航行したものだらうと云ふ。併し形が小さい爲めに、これは舟でないといふならば、秋田縣でテン草採取の爲めに現今用ゐられてゐる刳舟は何といふであらう。人を積載するキャバシチイがないといふのは想像で、これよりも小さい刳舟が人を載せてゐるのは秋田縣へ行けば直ぐ目撃することが出来る。

鳥居龍藏氏は此の舟は横臼であらうと云はれた。氏は印度支那に用ゐられてゐる横臼(第二圖)を例に引き、その形が全然似てゐることを指摘した。所が吾が邦に於いては、横臼は酒の醸造その他特殊の場合に於いてのみ横臼を用ゐ、穀物のグリーンチングには縦臼を使つたらしい。臺灣の土人は今日でも縦臼を用ゐてゐる。臺灣のはウスンと云つて、繪に見る兎の餅搗の臼と同一形狀を呈してゐる。マルタの *Orradino Hill* で發見せられた新石器時代の遺物に横臼(第二圖)があるが、材料も違ふけれど、その形が全く異つてゐる。アイヌの *Seta-oi-pap* 即ち飼料槽(第四圖)と似てゐるけれど、その構造が異ふ。

然るに之を福島縣相馬郡福浦村で用ゐるドンボブネ(第五圖)といふ舟に比較すると、形狀が殆んど全く同一である。ドンボブネは鰻釣その他漁業用に供せられ、材は大方杉或は樅で、長さ一丈五尺五寸、廣さ二尺五寸、深さ一尺二寸位を普通とするが、中には極めて小形のものもある。前部には三角形の扁平部があり、後部には長方形の扁平部がある。これは矢張刳舟で、材を縦に二つ綴り合はした一種特別の *two-timber-canoe* である。秋田縣では田澤湖、八郎瀨は勿論、日本海に面した沿海地方でも今尙ほ刳舟(第六圖)を用ゐて居り、それからずつと南下した越中の神通川でもイクリブネを用ゐてゐる。八郎瀨のテン草採集の刳舟は、形に於いて小谷沼刳舟に近い、他は必ずしもさうではなないが、併し濱田刳舟、大寶刳舟、ドンボブネ、山川村刳舟、現行のアイヌ刳舟(第七圖)と、遺物、殘物取り交ぜて互に系統を相引いてゐる。或る人種學者は此れ等を日本人の祖先が殘したものと解釋してゐるが、予は強いてさう考へる必要を認めない。予は之を先住民が石器時代に使つたもの、またそのサブヴァイヴルと認める方が穩當であると思ふ。

予の考に依ると、北方系統のものは何うも鏢節形を呈して居り、南方系統のものは割竹形を呈してゐたやうに思はれる。それ故予は前者をアイヌ式と呼び、後者を倭人式と呼ばうと思つてゐる。

第四章 濱田刳舟

濱田刳舟は安房濱田の鉦切船越神社ナタキリフナゴシの寶庫に所藏せられてゐる。これは歴史的遺物で、大分前から識者の注目する所となり、中村國香の『房總志料』、嶺田雋の『房總雜記』に記載せられてゐる。此の刳舟については故岡部精一及び、八木柴三郎氏の研究が發表せられてゐる。中村國香は之を以て蝦夷から漂流したものと斷じ、岡部精一はアイヌの遺物と斷定してゐる。

此の刳舟(第八圖)のデメンションは既に記載した。材質は不明である。形状は大分壞れてゐるので原形を知ることが出来ないが、側面圖は新月形であり、平面圖は砲彈形であり、殆んど舳艫の差別がない。全體に大分蝕ばんでゐるけれど、鈍い利器で木を刳つた痕跡は残つてゐる。それ故予は之を石器時代のものと思ふ。

此の刳舟については色々傳説が伴つてゐるが、その一つを示すと、昔一柱の神があつて、此の船に乗つて水府から來り、手斧で洞を山腹に穿つてそれに住んだ、その洞が即ち今の手斧鑿神社ナタキリであるといふ。然るにそれは Mythology の方からいふと、鉦切船越傳説ともいふべきもので、濱田のみならず他にもあるといふ。『房總志料』に従へば、手斧鑿明神は稻田姫を祭つたもので、道を隔て、左右に二つの祠があり、一を上、他を下の祠といふ。上の祠に大なる石窟があり、昔手斧鑿明神が使節を派して靈通を求めしめた所。使節は此の地の靈怪なるを愛し、窟に匿れて歸らなかつたので、明神は大に怒つて來り攻めたが、使節は窟から出て來ない。それ故已むなく明神は下の祠を領するとなつたとある。これは相異つた二種の民族が土地の所有權を抗争したトレースとも見るべきもので、出雲の國讓神話と類似してゐる。予はこれを所謂『國覓』傳説クニミヤヒの一分派で、migration period に起り易い性質のものと思ふ。予の考に依れば、神社は固と一つであつたが、或る時代にこれを南北に兩斷する道路が出来た爲めに、上の祠、下の祠の二

つに分れたのであらう。この事は、鉈切神社には社殿があり、舟越神社にはそれのないのを見ても分る。

上の祠には深さ約六十尺、廣さ十九尺餘りの洞窟があり、其の中から多數の骨片、土器等が出たといふ。刳舟は知られざる古い昔から、此の窟の中に保存せられてゐたといふ。て之を死者を葬つた遺跡となし、刳舟を木棺に擬しようとする者もあるが、それは形を一見すれば間違であることが直ぐと知られる。

房總半島に於ける石器の分布から推すと、原住民が今の武總地方から年毎に南下して、次第に半島の南端洲崎方面に至つたことは明らかである。原住民が可成に繁殖してその生活が共同的になつた時、新しい種族が海から侵入して來て、洲崎と大武崎とに抱かれた館山海灣の中心に沿うて棲息し、平久里川、汐入川の沖積地に占據するに至つたので、原住民は平地から高地へ、高地から北方へ漸次逃避したといふことは十分に想像の餘地がある。文明、野蠻兩民族が同時に同地方に住む時、前者が *coastal plain* を占め、後者が *high land* に據ることは、臺灣に於ける土人と漢人との分布を考へれば直ぐ領解の出來ることである。原住民は固より *race of fishers* で、到底 *race of farmers* たる新來民族の敵ではなかつた。かくして原住民は新來民に敗られて逃避し、噴岌たる峭嶺に萎縮したる生活を送つてゐた。此の刳舟は實に此の慘苦な經驗を嘗めた原住民の遺物である。形狀から觀ると、大分小谷沼刳舟とは違ふが、それにして大寶刳舟などよりは、原始的なところがある。此の刳舟は比較的新しく見えるが、その材は殆んど分解して居り、餘程久しき星霜を経たものと思はれる。それ故、予は之をアイヌが館山海灣内で漁業用に使つたものが、何かの機會で此の洞窟中に保存せられ、後には鉈切明神傳説と結びつけられて、宗教的渴仰の對象となつたものであらうと思ふ。

第五章 大寶刳舟

大寶刳舟(第九圖)は常陸大寶神社に保存せられてゐる。此の刳舟の發掘のデイトは不明であるが、餘程久しい以前から保存せられてゐたものらしい。形狀は他のスペシメンズと異なり、長さの割合に廣さ小さく、深さは殊に淺い。

八木獎三郎氏は曾て之を調査して、火で焼いた痕跡があるから、石器時代に火力を用ゐて刳つたものだらうと云はれたが、予の觀察では焼かれた形跡は何處にもない。焼かれたやうに見えたのは、長く沼の中に埋まつてゐた爲めに、變質して黒ずんだのである。此の點に於いてこれは小谷沿刳舟、山川村刳舟と略ぼ同一のフ、ースに在る。また濱田刳舟と、殘シ沼沿刳舟は殆んど全く黒化せず、一寸目には極めて新らしく見える。之は海水其他の影響であると思ふ。

此の刳舟について特に注意すべき點は、それが極めて低平であることである。内部の底が舷部の垂直に對してくつきりと線を劃してゐるなどは、鋭利な刃物を使はなければ出来ない仕事である。最も注意せねばならぬのは、その舷部は枝を應用したとて、船體の水平に對し、軸部は約四十度上向し、その中心に圓心を持つてゐるのは面白い。これは後世の造船家が木船の建造に際して、木材の *natural bend* を利用したのと同じく、上向すべき必要のある場所へ上向した枝を持つて行つたものである。彫刻家が木理、貝理を利用するが如く、昔の工業家の心理作用を窺ふべき一つの好材料である。

此の刳舟が大寶沼から掘り出されたこと、周圍に沼澤の多かつたこと、また刳舟それ自身の形狀から考へて見て、これが *Lacustrine* 或は *Potamic* のものであることは知れる。併しその年代を推定するとは出来ない。大寶神社東方の低地では、地面下約二十尺の處にケトゥ層があり、その層から土製錘が發掘せられるから、若し此の刳舟の發掘せられた個處が、地面下いくらの處であるかといふとさへ分れば、此の舟の年代も略ぼ決せられるが、發掘の歴史、年月が不明では精確なる推定が出来よう筈はない。たゞの目測によれば、予は之を他の調査者の如く、石器時代のものと思ひ度くない。此の刳舟の刳り方は、他の石器時代遺物よりも技巧に於いて優れ、木材の取り扱ひ方に於いて優れてゐる。素より古いものには相違ないが、先史時代のものでなく、恐らく歴史時代のものであらう。

第六章 山川村刳舟

山川村發掘の刳舟遺物は、現在は東京帝室博物館に所藏せられてゐる。大正四年四月二十六日、下總國結城郡中結

城村大字下山川字沖の中第二百六十六番水田——原の山川沼に當つてゐる個所の深さ約十八尺の下から發見せられたもので、舟は上向に横はつてゐた。附近には船體と思はるゝものが幾個か埋没し居り、數年前には長さ約二間の小形の刳舟を發掘したことがあるといふ。

此の刳舟は、艀部も、艀部も、舷部もいたく破損してゐるので、原形を知る由がないが、大體に於いては大寶刳舟に類してゐる。最も注目すべきは、その艀部内面の繰り方で、その末端から約二尺四寸だけ斜めに左右兩側へ刳り下げ、底部上面に達し、明らかに三角形を描いてゐることである。底部には可成に大きな節が二つあるから、その部分が木材の中心を離れてゐることが知られる。此の材質は今尙ほ明らかでない。焼いた痕跡があるが、それは發掘後のものである。此の刳舟も無論湖沼用のものであらうが、今の所、年代を定めることが出來ぬ。周圍には石器時代の遺跡が多いから、或は石器時代の遺物かとも思はれるが、發掘場所の地學的研究を試みた上でなければ斷定は下されない。予は大寶刳舟、清瀧刳舟と共に、他日此の刳舟に就いて詳述する機會があらうと思ふ。

第七章 殘シ沼刳舟

殘シ沼發掘の刳舟については、予はその發掘當時こそは側にはゐなかつたが、屢々現場について調査し、また船體についても研究したから、十分の自信を以てその結果を發表することが出来る。左は即ち予が造船協會々頭に差し出した調査報告書である。多少の重複は免れないけれども、便宜上こゝに抜萃するから姑らく眼を貸されんことを冀ふ。

第一節 しがき

大正六年の夏期に於けるわが邦の旱魃は、近來では稍々著しい方で、各地方では灌漑用水の缺乏に困じたが、千葉縣の海上、匝瑳二郡に亘れる沼澤地方に於いても非常なる減水を來し、匝瑳郡須賀村附近の沼澤は殆んど全く沼水が涸れて、その底の泥土がから／＼に乾いて了つた。泥土が乾くと罅裂を生ずるもので、それから約一年を経た今日に於いてさへ、淺シ沼の水底には多數の罅裂を認めるとが出来る。此の旱魃は吾々日本の船舶考古學を研究してゐる者

に取つて、二つの大きな新材料を提供して呉れた。その一つは横須賀に於ける沼澤の水面下に沈潜した木材の存在してゐると、他の一つは殘シ沼から一隻の單材刳舟を發掘し得たとである。前者は吾々の研究の直接目的でないから此處では論ぜぬことにし、後者について聊か研究結果の概略を報告し、先輩及び諸君の御批評を仰ぎ度いと思ふ。

第二節——發見の次第

予は此の單材刳舟の發見者でないから、先づその發見の次第を、發見者たる石田氏の談話に基づいて記述し、發見者の發掘の勞力と功績とを讚美する義務があると思ふ。大正五年六月頃、同氏は千葉縣匝瑳郡福岡町大字米倉に屬する米倉開墾二六號地に於いて、用水堀を修繕してゐる間に、竿の末端が堅い物に觸れたので、それを發掘して見た處一箇の樫が出て來た。次いでその附近を探つて見たら、大きな材木と思はれる物體の沈んでゐるとが分つた。併し水量が多くてそれを發掘するのは容易なこととなく、若し強いて發掘しようとするれば多額の費用を要するので、同氏は一時その發掘を中止して好機の到るのを待つてゐた。

發掘の樫はその後約半ヶ年ばかり保存せられてゐたが、石田氏の知らぬ間に家族が燃料に供して了つたので、今は悉しくその形體、大きさなどを知るとは不可能である。併し同氏及び福岡町居住の伊藤源助氏の談話を綜合すると、材質は何とも知れないけれど、長さは約七呎あり、その一端ハンドルの處は腐朽して原形を止めなかつたが圓形突起と見ゆるものが二個あつた。柄は圓く、末端は擴がつて長方形を呈し、その厚さは約一吋あつた。詳細のことは記憶して居らぬが、長方形の處は双刃であつたやうに思はれるといふ事である。かくて石田氏は予の想像圖を修正して挿圖の如くした(第十圖)。

然るに大正六年の夏期は異常の日照續きの爲め、水田や沼澤の水量が激減し、或る場所は徒歩で歩くことが出来るほどであつた。石田氏は前年のことを想ひ出して、同年八月二十一日家族及び村人と力を協して、堅い物體の發掘に従事し、沼の底から約八尺の個所まで掘り下げて、漸く一巨材の横はつてゐることを知り、遂にそれを掘り出すことが出來た。

愈々掘り出して見ると、それは刳舟であつたので、同氏はそれを自宅に運び、洗ひ淨めて大切に保存することにした。予は數回同氏を訪問して實物について研究し、また發掘現場に赴いて地層の調査をした。同氏の語る所によれば、該刳舟は約十吋（即ち四度）の傾斜を以て深さ九呎の地下に後部を下にして横はり、六吋は荒砂の層に喰ひ込み、四吋はその上のケトウ層に喰ひ込んでゐたといふ。

第三節——船體の調査

刳舟の船體は、瞥見に於いては、甚だ古からぬものゝやうに思はれるが、檢鏡の結果材質の大分變敗してゐるのを認めた。材質は變敗の度の少い處では比較的硬いが、さうでない部分はぼろ／＼になつてゐる。材は一見杉材の如くに思はれるが、白澤林學博士の鑑定に依れば實は樅材である。

船體（第十一圖）は全長十六呎三吋二分の一で、前後部の形は殆んど相均しいが、自然の龜裂であるか何うかは知れないけれど、後部には一呎餘の切れ込みがあり、前部は右舷に於いて著るしく突起してゐる。恐らく始めは兩端とも三角形を呈してゐたのが、腐朽その他の原因で、現在の如き形狀に變つたのであらう。平面圖は全く梭形を呈してゐる。幅は中央部に於いて一呎一時、その前後も略ぼ同一の幅を有してゐるが、前端から一呎三吋二分の一の個處に於いて僅かに七吋二分の一を有するに過ぎない。

底部は大體に於いて扁平であるが、前後端に於いて上部に向つて彎曲し、船縁は略ぼ直線をなしてゐるから、側面圖は右舷も、左舷も、同じく弦を張つた弓の如き形を呈してゐる。外側に於ける底部から上縁に達する高さは、左右兩舷によつて多少の相違はあるが、大抵十吋乃至一呎である。内部の深さは六吋二分の一乃至八吋である。正面圖は前部と後部とによつて相異なるも、略ぼ半圓形を呈してゐる。前部は後部よりも高く昂つてゐる。厚さは嚴密に調査することが出来なかつたけれども、後部から計つて三呎の點が三吋、六呎の點が三吋、九呎の點が四吋、十二呎の點が五吋二分の一あるのを認めた。前端と後端とに於いては言ふまでもなく厚さは次第に減じてゐる。

此の刳舟に於いて、特徴と感ぜらるゝのは、クロス・ビームに匹敵する部分のあることである。即ち木材の内部

を剝る時に、二個所だけ剝り残して、船體に横張力を保たしめたことである。これを假りに横梁狀突起(第十二圖)と名づける。後方の横梁狀突起は幅五吋、高さが前方三吋、後方三吋二分の一あり、前方の横梁狀突起は幅三吋あり、高さが後方五吋、前方三吋あり、何れも後方よりも前方に於いて、高さの減少してゐるとは、建造者の手工の癖と見ることが出来る。底部から見ると、大分縦の龜裂があるが、内部は比較的にながれが少い、此の二個の横梁狀突起は、たしかに此の船體に横張力を與へたに相違ない。かくの如き形式は全く一新標本で、從來曾て發見せられたことがない。此の點に於いて、予は此の剝船は貴重なる考古學上の一材料と見做すものである。

該船材は上部に於いて木材本來の色を失はないでゐるが、下部に於いては多少の黒味を帯びてゐる。その反對に硬度は底部に於て大きく、内部及び上縁に於て小さい。それは言ふ迄もなく埋まつてゐた個所の土質によると思ふ。

舳部の龜裂に於いて、腐朽した植物性物質がはさまつてゐた。それは蘆葦の類の莖葉と認められるが、水密の觀念に基づいて、漏水を防ぐ爲めに填塞されたものか、或は沈没後自然的にははさまつたものであるかは分らない。予はむしろ後者であらうと思ふ。また後部の切れ込みは舵を裝する爲めに、特に設けられたものでないかとも思はれるが、これにしては餘りに低きに過ぎる、これでは舵の操縦が不便である。發見者の言に依れば、現場の附近に舵らしいものがあつたといふとなので、兩三回檢索して見たが、その都度水量が多かつたので好結果を齎らすとが出来なかつた。併し、こんな小さな船に、特に舵が設けられてあつたとは信じられない。況んや前記の如く『舵擡』がその附近から出て、それで此の船體を操縦したものとすれば、特に舵は使はなかつても、擡だけで十分針路を轉ぜしめることが出来るに於いてをや。

また前部の底面中央に、徑二吋ばかりの深い孔が明いてゐるが、それは故意に穿つたものでなく、節孔か何か自然のものであらう。

も一つ斷はつて置き度いことは、予は此の論文に於いて、前部後部の語を用ゐてゐるが、兩部殆んど同形なので何れをどれと定めることは困難である。で、一寸目に舳と思はれた方を前部とし、その反對を後部と稱した迄である。

別に確乎たる意見がある譯ではなし。

第四節——造船技術と其の器具

此の刳舟の船體を具さに觀ると、その建造者の知力、建造の順序、使用の器具などが窺はれる。この刳舟は云ふまでもなく單材刳舟であるが、一本の樹幹を二つ割にして、その扁平部を刳つたものではなく、一本の樹幹を横たへて、上部から段々と刳つて往つたことが、その形狀によつてそれと察しられる。即ち此の刳舟は前述の刳舟の二つの型——アイヌ型(サセックス型)と石棺型(ジャマン型)——の中、わが邦に於いては最も古いと思はれるアイヌ型に屬するもので、系統は南方よりは北方に近く、線が直線ではなくて曲線から成つてゐる。

底部は自然の儘で、殆んど人工が加はつて居ないが、皮だけは剥き取つて水中の滑走を容易にしたらしい。内部の刳削は石器を用ゐたのではあるまい乎。素より地下に多く年所を経て材が變敗してゐるので、その詳細な技巧は知ることは出來ないけれども、刳り殘された横梁狀突起を見ると、決して手際よく往つてゐない、銳利な鐵器などで刳られたものとは信じられない。

最も注意すべき點は、その前方の横梁狀突起に於ける節(第十二圖)である、此の節は黒色を呈してゐる。之は炭化したものではなくて、明かに火を以て焼いたとが知られる。で、私は建造者が硬い節を鈍い石器で切るとが出來ず、火で焼き取つたものと思ふ。今までも考古學の著述などに、何處の舟には焼いた痕跡があるなど、いふ記事が見えてゐるが、それ等は眞の想像であつて、船材の炭化或はそれに近い自然的現象を、火力を用ゐた人爲的結果と思ひ誤つたものである。現に大寶の刳舟の如きは、地方の人もしか思ひ、八木獎三郎氏などはその著『日本考古學』に於いて、『處々焼け焦げの迹を存じ——』と記してゐるが、予の觀たところでは寸毫も火力の働いた痕跡を認めることが出來なかつた。

此の刳舟建造者の知力は、比較的に進んでゐたものと見え、横張力を保たしめる爲めに、特に横梁狀突起を二個所まで刳り殘したのは注意すべきことである。その突起の後部が深く、前部が淺く刳られたことと、船體の厚さが、後

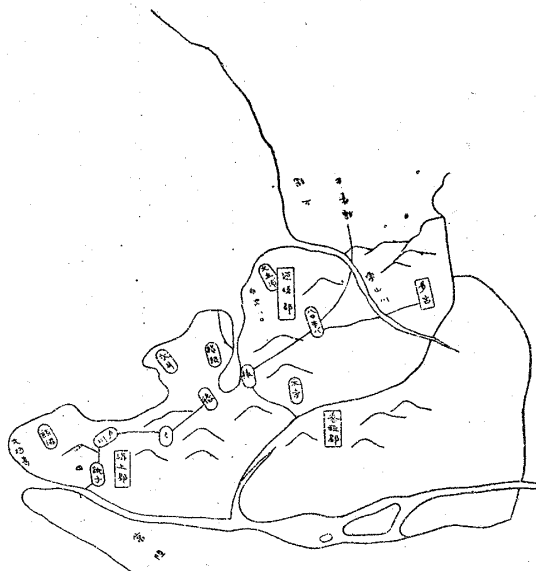
部よりも前部に於いて大きいことは、建造者の手の癖を現はしてゐて面白い。恐らく建造者は常に前部の方に自分を置いて、後部の方から削り始めたのではあるまい乎。前後の兩端を高く昂げて、その上縁に三角形扁平部を造つたと思はれる形跡のあることは、造船發達史の上から觀て殊に面白い點である。此の舟の眞價を知らうとせば、他の東部日本發掘の古代刳舟と比較して見なければならぬが、それは他日に譲ることにする。

また失はれたる櫂が、果して發見者の云ふが如き形を呈してゐたとすれば、その技巧は驚くべきものである。

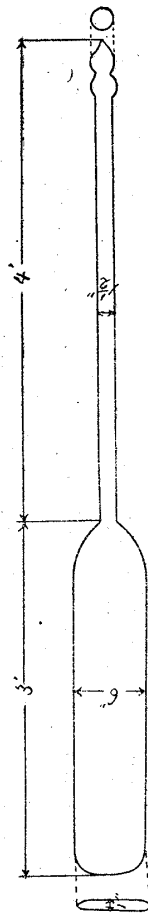
第五節——現場の地學的史學的觀察

此の刳舟の年代を定めることは非常の困難である。船體それ自身だけでも、略ぼ見當はつかぬことはないが、予は尙ほ間違を避ける爲めに、現場附近の地學的研究所を試みた。予は第二回の研究旅行に於いて、發掘現場の地層を検した。その結果、水の下は厚さ約三呎を有するデロ(泥の方言)層、その下に厚さ約六呎を有するケトゥ(蘆葦の根の半ば變敗したものが固まつて出來たもの。ケトゥの語原は明かでないか、或は『菅の土』を意味するアイヌ語 “Ki-toi” にはあるまいか。之は尙考究を要する)層で、その下に荒砂の層があることを知つた(第十三圖)。而して特に注意すべきことは、ケトゥ層と荒砂層との中間に、荒砂よりは稍々微な砂の層があることである。予は完全なる器械を持たなかつた爲め、竹竿に特殊の裝置を施したものでボーリングを試みたので、嚴密なる結果を得ることが出來なかつたけれども、水底が大體に於いて以上の三層から成り立つてゐることを確めた。

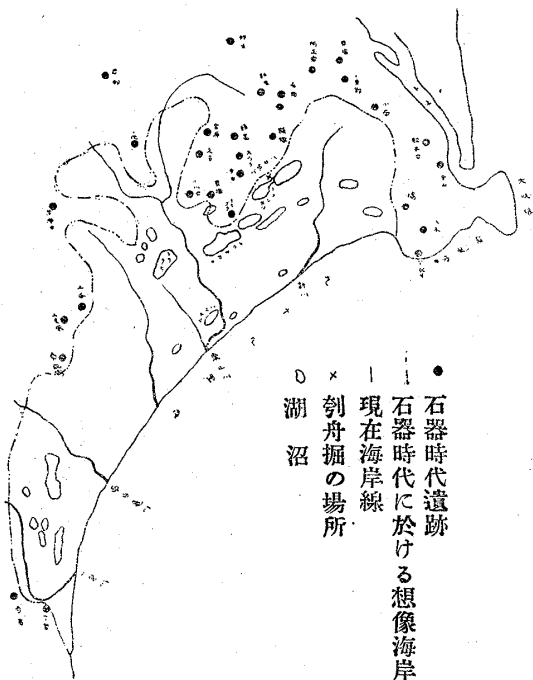
此の邊は一帶に沼澤沮洳の地である。今日に於いては大分開墾され、現場の如きも開墾二十六號地などいふ立派な耕地らしい名稱を以て呼ばれてゐるけれど、現場を臨檢したものは、蘆葦茫茫たる一大沼澤の一部分に過ぎないことを知るであらう。此の邊は隣人によつて『舊新田』と呼ばれてゐる、これは元文年間に一旦開墾して水田とせられたけれど、排水が巧く行かないで間もなく荒廢した爲めに與へられた名である。此の舊新田が再び開墾されたのは明治十九年のとて、工事は約六箇年を費して同二十五年に竣功した。福岡町(八日市場)と横須賀村との間、字八石といふ處の、國道の側に立てられた『墾田碑』は、此の附近の最近の歴史を語つてゐるから、此處に一寸と紹介する。



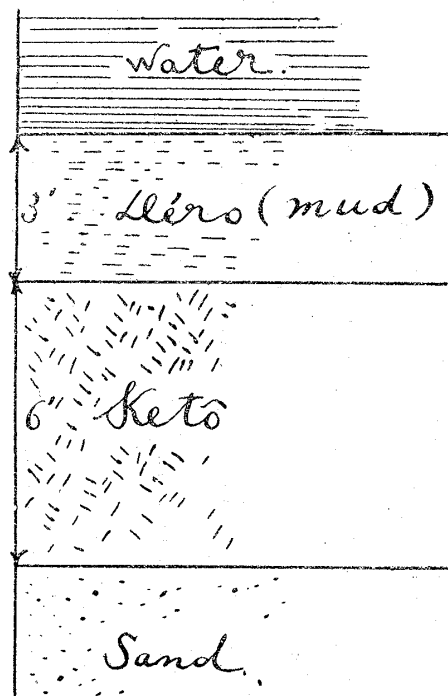
(圖四十第)



(圖十第)



(圖五十第)



(圖三十第)

『匠瑳郡八日市場南境。抵横須賀村。有藪澤焉。曰舊新田。往昔元文中。邑民請幕府。墾闢爲田。已而蓄水無所洩。遂復荒蕪矣。大政復古之際。没入爲官地。明治十九年。邑民三十七人同盟。欲再墾之。乃私立總代人。相共請官而墾之。即相其地勢。淺處則耕治。以種秔稻。深處則植蓮藕。以爲田。二十三町有奇。至二十五年。工事告竣。官命吏檢査定租額云。越二十九年。同盟者胥議。將記其事。勒石。以傳于將來。乃來請余文。且曰。吾輩闢荒蕪。非特營私利。卽爲國家謀益也。方今皇上勵精圖治。欲以建富強之業。爲之民者。豈可不勉勤。以奉遵聖旨哉。抑因天之時。就地之利。庶人之職也。吾輩聊盡其職分耳。且夫易興難繼者業也。往者此地嘗留余田焉。故有舊新田之號。以其功力不繼。卒復爲汗萊矣。然則弗可及。今而不爲繼續之計。但使來者盜其廢興之由。而孳々乎賦務則庶幾不墜其緒也。具以敢請。余聞而嘉之。因詳記其事。又爲之歌。曰。茫々兮藪澤。墾闢以爲田。就淺種秔稻。就深植蓮藕。秔稻黃雲簇。收穫喜有年。蓮藕且生利。子翹疊荷錢。公私共有益。事豈可不傳。

明治廿九年歲在丙申十月下浣

栗水並木正詔撰文並書題額

嘗に此の『舊新田』ばかりではなく、海上、匠瑳、長生の三郡に亘つて、西北から東南に連る沼澤地帯は、排水が巧く行かない爲めに、廣濶な地積が不毛の儘に残り、徒らに蘆葦の繁茂するに任せてある。即ち北東は飯岡の北西に湛へてゐる權田沼を始めとして、袋、芝原、上谷中、平木、下谷、宿の各村に沼があり、須賀村には此の殘沼の外に廣濶な面積を有する多數の沼があつて、隣の東陽村の乾草沼ヒクサに連續し、その東南方には堀川、今泉の小沼澤があり、南下して鳥喰沼、蓮沼等を形成し、一宮の北方に於ける沼澤群に終つてゐる。此の沼澤地帯は略ぼ九十九里濱の海岸線と併行し、海面と沼澤地帯との間には彎曲した細長い樹林地帯がある。私の考によると、此の沼澤地帯は昔——遅くとも石器時代の海岸線であつたやうに思はれる。而して此の地方では沼澤を『ヤチ』といふ、正にアイヌ語の“Yachi”と同系であることも注意すべきである。

かの椿海新田の如きは、矢張り湖水の跡で、その開墾は徳川時代の事に屬してゐる。『大日本輿地便覽』といふ地圖——恐らく『大日本全圖』といふ古地圖に基づいて眞偽構はず踏襲的に製圖したのであらう。さほど古いものではなく且つ餘り信憑の出来るものでないが——に依ると、椿海といふ大きな湖が九十九里濱に注入してゐる(第十四圖)。此の湖水の排水口は、今新川として残つてゐる小さな川であるが、その昔は大きな入江であつたであらう。椿海、干瀉などの地名は、昔の地形を語るものと思はれる。又栗山川、南白龜川なども、矢張り新川と同じく、昔の湖水の排

水口であつたに相違ない。石器時代に於いては、海岸は永井邊から彎入して樺海に到り、それから北方の丘陵地帯の下を縫うて南下し、大東崎に達したと思はれる。今日に於いては、此の長い沼澤の鎖をなせる水濕地の外側に、樹木多き沖積層の廣濶な地面があるが、その高距は二・七米突乃至七米突ばかりで、沼澤地帯の方が一般に比較的に高い。故に海岸地帯は遙か後世に出來たものに相違ない。此の地理的觀察を助ける有力な考古學的研究がある。即ち石器時代の遺物の分布(第十五圖)を觀ると多くは沼澤地帯の内側に限られてゐる。之を表示して見ると、

郡名	町村名	字名	發見遺物
匝瑳	匝瑳	中臺	石鏃
同	同	大浦	土器、石器
同	同	飯倉	石鏃、打石斧、磨石斧
同	同	貝塚	土器、土偶、石器
同	同	久方	石鏃、磨石斧、凹石
同	同	小川	石鏃
同	同	久井	土器、土偶、動物土偶、磨石斧、打石斧、石劍、砥石、石棒、貝輪、骨鉗、人骨
同	同	余山	石鏃、磨石斧
同	同	八木	打石斧、磨石斧、凹石、石皿
同	同	埴木	土偶、土版、石鏃、石匙、打石斧、磨石斧、獸骨
同	同	船木	土器、石器
同	同	下布	土器、打石斧、石匙、石皿、凹石、石棒、獸骨角
同	同	上貝	土器、打石斧、磨石斧、圓石
同	同	南飯塚	土器
同	同	上谷	土器、磨石斧、敲石
同	同	小池	土器
同	同	二穀塚	土器
同	同	一宮	土器

講
演
東部日本發掘の列舟遺物

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同						
神	豐	同	飯	米	栗	山	府	同	良	八	同	神	津	東	小	香	滑	多	鶴	同	同	同	同	同	同	同
代	和		高	澤	源	倉	馬		文	都		里	宮	戸	門	取	河	古	枝		鄉				柄	睦
小	飯	金	飯	古	岩	新	長	貝	阿	神	木	白		玉	小	香	栗	染	立	網	石	中	上	寺		
貝								ノ	玉	ノ	ノ	井	内	貝	御	取	山	井	水	鳥	神	ノ	野	崎		
野	塚	原	高	原	部	里	岡	塚	臺	生	塚	塚	塚	造	近	塚	山	井	木	島	神	臺	野	崎		
磨石斧、凹石、獸骨	石鏃、石匙、打石斧、磨石斧、鹿角	磨石斧	土器、石器	石劍	獨鈷石	磨石斧	石鏃、打石斧、磨石斧、凹石、圓石、獸骨	土器、土偶、磨石斧、焚唇貝、貝輪	土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石鏃、砥石、緒締形石、凹石、石錘	土器、石器	土器、石器	土器	土器	土器	土器、石器	土器、動物形土偶	磨石斧、石剃刀	土器、石鏃、打石斧、磨石斧	石鏃	土器、磨石斧	土器、石斧、凹石、砥石	磨石斧、石棒	打石斧、石棒	石鏃		

同 東 城 小 南

備考

本表の地名遺物等は、總て東京帝國大學理科大學人類學教室の編纂に係る『日本石器時代人民遺物發見地名表』に據る。

の如くて、現今の丘陵地帯以外には發見せられない。これ等の遺跡は随分古いもので、新らしく見積つても三千年前のもものと見ることが出来る。その時代には沼澤地帯は海底であつたから、其處に遺跡のあらう筈はない。

これ等先史時代の遺物に富める丘陵地帯は、吾々の祖先にも餘程古くから知られてゐた。匝瑳村の老尾神社は小社であるが、下總十一座中の一で、『延喜式』の『神名帳』にもその名が現はれてゐる。その所在地は福岡町北方に隆起する匝瑳臺で、域内には一株の老杉があつて、下總沿岸を航海する者の唯一のランド・マークとなつてゐる。此の神社は傳説の上では、東夷を討つて大功を立て、遂に匝瑳郡を置く動機を作つた物部小事大連を祀つたものだといふが中世も引續き匝瑳黨の居館があつた如く、餘程古い時代にも豪族が住んでゐたと見え、近年臺地から自然石の石棺が發見せられた。香取神社の末社にも匝瑳殿といふのがあり、『成田參詣記』にも、生尾明神の祠官は香取氏で、その別當神宮寺は今絶えて西福寺がその代りをつとめてゐると書いてあるから、此の二つは相關係してゐるに相違ない。また今の富浦村神宮寺も、生尾神社の別當と何等かの關係があるのであらう、その海岸を神宮寺濱と呼ぶことなども注意すべきである。併しそれ等の歴史は文獻によつて知らるゝだけで、書記せられず、傳説せられざる太古から人間の住んでゐたことは、遺跡遺物等によつて明らかにそれと知られるのである。予の考に依れば、此の深く彎入した靜海は、魚介を常食としたアイヌの祖先に取つては生活の安易な平安の城であつたらうと思ふ。之に反して九十九里濱に沿うた沿海平地は比較的新しいものである。その開拓については色々傳説がないではないが、古くとも奈良時代以後のことである。匝瑳郡に屬する幡間(尾垂)、山上(川邊)、野田(野手)、須賀(須賀)等の郷名は已に『和名抄』に現はれてゐるから、その頃既に略ぼ今日の状態を現じてゐたことは分る。

之等の諸點から推すと、初め此の沼澤地帯は海灣であり、次いで飯岡の邊に風の作用で砂嘴が出来、それが河川の

運搬作用と土地の隆起に助けられ、段々新地形を成して西或は西南に伸び、その結果海灣は遂に一の囊狀入江となり、その後排水口が狭くなつて遂に湖沼の形となつたものである。予がボーリングによつて知り得た地層は實に此の地理的變遷を明らかに語るもので、上から數へて第一の『デロ』層は現今の状態を示し、第二の『ケトウ』層は古き湖沼時代を語り、第三の砂層の細砂は囊狀入江の排水口の時代を示し、粗砂は海岸線時代を語るものではあるまい乎。

第六節——結 言

以上論述し來つた諸點から、予は(一)此の刳舟を石器時代のものと斷ずる。果して然りとすれば、(二)その建造者や使用者は原住民のアイヌであつたに相違なく、(三)使用された場所は浪の比較的靜かな海灣であつたらう。(四)使用の目的は必ずしも單一ではなく、或は交通、或は漁撈の爲めにも用ゐられたらうが、まづ漁撈が主ではなかつたかと思はれる。(五)建造には主として石器を用ゐる、(六)従として硬部の細工に火力を用ゐたことが明らかである。予の此の結言は次の理由に基づく。

(1) 刳舟發掘現場は、石器時代の遺跡に取り圍まれてゐること。

(2) 刳舟は茨城縣小谷沼發掘、千葉縣手斧鑿神社保存、茨城縣大寶神社保存、アイヌ現在使用の刳舟と同型で船舶考古學上、アイヌ型或は鯉節型と稱ふべきものであること。

(3) 刳舟は海岸に見らるゝ粗砂とケトウ層との間から發掘されたこと。

(4) 石器時代遺跡の分布から見て、交通は多く陸上によつて行はれたと想像せられること。

(5) 刳舟の刳り方に手癖があり、各部の廣さ、厚さが一定せず、技巧が手際よく行つてゐないこと。

(6) 前部の横梁狀突起の節は、たしかに火で焼いたと認めらるること。

*

*

*

*

*

*

以上、東日本發掘の刳舟遺物を比較研究して見ると、その製造の時代が多少異つて居り、従つてその形狀、技巧にもそれ／＼差異はあるけれど、木材を圓心から二つに割つて、その一方の扁平部から刳るといふ割竹型の方法を取ら

ず、木材を上部から段々に刳つて行つて窪みを造るといふ、鯉節型の方法を取つた點に於いて一致してゐる。予の考ではこれ等の刳舟は大方原住民族、即ち現今のアイヌの祖先が内地に占據してゐた時使つたものであつて、その年代は歴史を超越した石器時代であらうと思ふ。但し大寶刳舟、山川村刳舟は發掘現場の關係が不明であるから、その年代を推想することが困難である。併し乍ら先住民が鯉節型の刳舟を使つてゐたといふこと又は、これ等の材料によつて十分に立證せられる。現在のアイヌの大船モチアは日本人の造船様式を輸入して、多少の改善を企てたやうに思はれるが、その刳舟に至つては原形式を保持して、これ等刳舟遺物と共通點があるやうに思はれる。アイヌの刳ベツクアット舟并びにスチツト、ボート綴舟については、他日詳論する機會があらうが、兎に角現存刳舟と遺物刳舟との間には分離することの出來ない連絡點が見出され、従つて石器時代から原史時代へかけて、アイヌ種族が本邦内地——殊に東部地方に生活して、漁撈生活を送つてゐたといふことも分り、またその造船形式が今尙ほその地方に残存してゐるといふことも立證せられて面白い。

これで予の講演は終りを告げる。しかし乍ら、此の研究はまだ完成した譯ではない。故にこゝにはほんの概略を記載し、他日研究の完成を俟つて改めて先輩諸君に報告をし度いと思つてゐる。予は此の研究に際し、多大の便宜と助力とを與へられたる寺野工學博士、今岡工學博士、白澤林學博士及び、考古學的研究について助言を與へられた鳥居龍藏、高橋健自兩氏に對して、こゝに敬意と謝意とを表するものである。